

学校教育目標	夢 チャレンジ ～かしこく やさしく たくましく～		
--------	---------------------------	--	--

a ミッション	学力向上を目指した組織的な授業改善と小中連携の深化	aビジョン	1.主体的・対話的で深い学びを目指す授業改善を通して、児童の「学び合い」を育む学校 2.「3つの宝」を行動規範として児童の心を育てる学校 3.保護者・地域から信頼される学校 -広島県学力向上地域指定校・広島県NIE実践（県独自枠）指定校・尾道市読書活動推進指定校-
---------	---------------------------	-------	---

尾道市立三成小学校

評価計画				自己評価					学校関係者評価			改善計画		
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
安定した学級経営の維持と向上	「チーム三成小学校」の一員として、学級経営力を高めることを通じて、児童の学び意欲を育てる。	信頼される学校づくりを推進するために保護者対応や小中連携を適時に行う。	【保護者連携】 ○保護者アンケートで、「小学校の対応に満足している」と回答している保護者の割合90%以上 【小中連携】 ○美木中ブロックでの職員間連携の年間回数、のべ20回以上	100%	保護者満足度 80.9% 小中連携 12回	保護者満足度 81.1% 小中連携 21回	保護者満足度 90.1% 小中連携 105%	B	「小学校の対応に満足している」保護者の割合は、81.1%であり、7月より若干改善した。日々行う保護者連携において、成果や良かった姿などの肯定的な情報を積極的に発信する機会が増えた。また、課題が発生した際には、真摯に取り組み、情報を開示していくことで、より信頼を高めていくように努めた。課題は解決済みのものや継続中のものがあり、今後も継続して取組を発信していくことが必要である。小中連携については、順調に回数を重ねている。3学期以降も計画的に進めていく。	3	0	0	○学校からの積極的な発信は、大変良いことである。続けていくこと。 ○数値の変化は必ずあるはずなので、あきらめず続けていくこと。	学校生活に対して不安や心配事を抱えている家庭へ、積極的に、継続して連携を進める。特に普段のコミュニケーションを重視し、取組の進捗状況を伝える。この時に保護者や児童の不安の原因や解決策について記録をし、職員間で共有することで、取組を次学年に向けても継続させていく。
		学級経営力を高めるために「三つの宝」の徹底を図る。	【三つの宝の醸成】 ○「三つの宝」の達成度について、教師による4段階評価の得点と、児童による4段階自己評価の得点の合計値6ポイント以上（7月 11月）	100%	児童自己評価 3.2 教師評価 2.6 合計 5.8	児童自己評価 3.2 教師評価 2.9 合計 6.1	102%	A	達成度は6.1でA評価であった。児童は、「三つの宝」を意識して生活しており、児童会と連携しながら教職員全体で指導することができた。数値の低かった「挨拶」についての項目も、意識的に声をかけたり、評価を工夫したことにより、肯定的な評価数値が上がっている。これからは引き続き、「三つの宝」についての指導を続け、委員会や児童会の活動と連動して児童が主体となる取組を進める。	3	0	0	○地域の一員としては、挨拶はよくできていると感じている。 掃除については、掃除用具の使い方を児童集会で示し、より丁寧な掃除ができるように指導する。 時間を守ることは、よくできていることをしっかりとほめて継続と徹底を図る。	挨拶については、今回取り組んだ表彰を継続し、よくできている児童を全体で評価して意識の向上を図る。 掃除については、掃除用具の使い方を児童集会で示し、より丁寧な掃除ができるように指導する。 時間を守ることは、よくできていることをしっかりとほめて継続と徹底を図る。
		【昨年度からの重点課題】 ○アクセス「教師サポート」得点50以上の児童数の割合100%達成	100%	118人/142人 50未満34人	139人/169人 50未満30人	82%	B	達成度は82%であり、B判定となった。得点50未満の児童は30名で、得点40未満の児童が6名含まれている。自己肯定感が低い児童が多いという傾向は変わっていない。しかし、50未満の児童であっても、1回目よりも数値が上がっている児童が増えていることから、意識的な声かけの成果が現れ始めている。逆に、1回目よりも数値が下がって50未満になっている児童もいる。友人関係や家庭でのできごとが児童の心情に影響を与えていることも予想される。そのため、授業中だけでなく学校生活の全般で児童の長所を見つけ、肯定的な声かけを続けていく。	3	0	0	○教師サポートが向上している点を、他の観点でもノウハウ活用して、改善を図ること。	校内研修で、目標に達していない児童の実態交流を行い、担任だけでなく全教職員で関わり、児童に「伝わるサポート」になるよう努める。また、肯定的な声かけを心がけ、次学年への希望や意欲を引き出す。そして、学習面や友人関係でのつまづきに早く対応できるように、教職員が児童の変化に敏感になれるように、研修を通してスキルを高める。	
主体的に学び、自分の成長が実感できる児童の育成	指導の徹底と児童の成長の見取り・評価	授業改善により学力を高めるとして、児童の学び意欲を高める。	【組織的な授業改善】 ○教師による授業評価表「学び合い」に関する4段階評価の平均得点3.5以上（毎校内研究授業後 年間9回以上） ○学校図書館や新聞を活用した授業研究を、一人1本以上行う。	100%	学び合い評価 3.5	学び合い評価 3.6	学び合い 161%	A	学び合う授業づくりに取り組み教師により自己評価が3.6ポイントで目標を達成することができた。全国学力学習状況調査の課題を分析し、2学期は、「問う」「読む」「書く」を重点的に意識して授業に臨んだことにより、児童に友達と学び合うよさが実感できる授業が浸透してきた結果であると考えられる。授業研究については、2学期に全員研究授業を行うことができた。新聞活用については、教師が計画的・継続的に授業に取り入れられたり、委員会活動を通して親しませる機会を多くしたりしたことにより、新聞を見る機会が日常的になってきた。図書館の利活用も学校図書館司書教諭と連携しながら活用実態が高まっている。	3	0	0	○新聞の利用は効果があると思う。 ○掲示物などを見ていて、教師の指導センスの良さが伝わってくる。	図書館や新聞を活用した授業での成果物を整理・掲示するなどして、児童の意欲を高め、継続して情報活用能力や思考力、表現力の向上を図る。また、児童が主体的で深い学びができるように、「学び合いの時間」の設定に継続して取り組み、学び合うよさが実感できる授業改善を進める。
		学力の向上を図るために、授業改善と反復・徹底学習を両立させる。	【学力】 ○国語科・算数科単元テストの平均得点85.0点以上（1学期・2学期） ○全国学力学習状況調査の課題を校内研修で分析し、補充問題を全校で取り組む。（1人あたり年間30枚以上） ○標準学力検査で対全国平均比100以上の児童の割合65%以上（12月）	100%	国語平均85.0点 算数平均86.2点 実施枚数 学年平均 34.2枚	国語平均85.6点 算数平均84.3点 実施枚数 学年平均 108枚	標準学力検査 対全国比 国語科103% 算数科94% 全国平均100以上の児童54% 補充問題 360%	B	単元テストの平均得点は、国語科85.6点で目標を達成した。算数科は84.3点で、わずかに及ばなかった。授業や家庭学習で徹底的に反復学習を行ったことで一定の成果が得られた。東書Webシステムのプリント等を積極的に活用し、補充問題や活用問題に取り組んだことにより、情報量の多い問題や、思考力、活用力、表現力を問われる問題に対して抵抗感が下がり、自信を持って答えられるようになってきた。しかし、12月に実施した全国標準学力検査では、国語で全国平均点を上回った児童は148人（58%）で目標には届かなかった。また、算数においても126人（50%）であった。国語については、全国平均を100点としたときに本校の得点は103点で、平均より高い学力であることがわかった。特に過去3年間力を入れてきた「書くこと」の力がついてきている。（107点）一方算数は全国平均を100点としたときに本校の得点は93点で、大きな課題である。特に「関心・意欲」が低く、授業改善により児童の学習意欲を高めることから始めていかなければならない。	3	0	0	○子供の個性や特性を重視し、画一的な指導にならないように取り組んでいく必要がある。 ○個別指導の充実を望む。 ○学年間の差が大きいことを課題として、引き続き取り組んでいくこと。	毎日の授業と家庭学習で児童の理解度を確実に見取り、反復・徹底学習を行い学力の向上を図る。モジュールタイムでは、全国学力学習状況調査の課題を克服するための補充問題を重点的に実施し、当該学年で付けるべき力が児童一人一人に確実に身に付くよう、組織的な学力向上対策に取り組む。
		生活習慣の改善を通して、児童の気力・体力を高める。	○生活習慣の見直しを実行した児童の割合（児童アンケート調査の肯定的評価）80%以上 →歯みがき：強化週間の結果 →早寝：意識調査の結果 ○月別重点課題《握力・水泳など》で設定基準を達成した児童の割合80%以上	100%	78.9%	85%	106%	A	9月当初の児童アンケートでは「早寝ができていない」児童の割合は61%であった。ほげんだよりでの家庭への周知や体重測定時の児童への保健指導を行った後、早寝についての意識がどれだけ高まったかを11月にアンケート調査をしたところ、結果は85%であった。実態の把握は難しいが、早寝への意識は高まっている。引き続き動きかけを続け、意識の向上だけでなく、健康的な生活の改善・実践につながるよう取組を行っていく。	3	0	0	○保健だよりなどを活用して、保護者とコミュニケーションをしっかりと図ることが重要である。	児童には、早寝の重要性について引き続き指導を続けていく。意識の向上が見られない児童については、個別の指導を行ったり、担任とも連携を図り個々の家庭に継続して啓発に取り組む。
				100%	水泳 82% 握力 78.6%	握力 71.5%	98%	B	1学期から継続して行ってきた握力の取組により、児童が握力向上に関心を持ち、意欲的に取り組む姿が見られた。1月に握力の再計測をした結果、1学期の記録から向上した児童の割合は71.5%であった。1学期の取組を合わせると設定基準（児童にとっての目標）を超えた児童が78.6%でそのうち7割がさらに向上していることから、自己評価はBとした。年間を通して握力に重点を置いて取り組んだことにより、多くの児童の握力が向上させることができたが、設定基準の見直しを引き続き行っていく必要がある。	3	0	0	○ゲームでの遊びが多いので、学校で意欲的に取り組むことは大変良いことである。	年間を通して、握力の向上に努めてきたが、目標値（4月：設定基準〈児童にとっての目標値〉に対する通過率80%以上/1月：1学期と比べて向上があった児童の割合80%以上）を達成することができなかった。握力を高める「遊び」の経験が不足している現代においては、握力向上を長期的な課題として、次年度も引き続き重点として取り組んでいく。

【外部評価】
イ：自己評価は適正である。 ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。